

私の切ったチーズケーキ

浅木
昂

人
物

沢村小春（19）

タカハシ洋菓子店バイト

高橋重彦（36）

タカハシ洋菓子店店長

三島明（27）客

○タカハシ洋菓子店・店内・夕

店内には客が一人もない。窓は外から雨が叩きつけるように降っている。

店内でエプロン姿の沢村小春（19）

がケーキのショーケースに頬杖をついてだるそうにしている。エプロン姿の

高橋重彦（36）が焼き菓子の賞味期限チェックをしている。

小春「高橋店長。暇です」

高橋「小春ちゃん、それならクッキーの賞味期限チェックやってくれ」

小春「それ、午前中にやりましたよ」

高橋「あー、窓でも拭くか」

小春「もう、今日は3回くらい拭いてますってば」

高橋「他にやることあるかな」

小春、窓を指さして。

小春「こんな天気じゃ、お客さんなんて来ないですって」

高橋、入口から覗き込むように外を見る。土砂降りの雨が降っている。

小春「お店、閉めちゃいませんか。誰も来ないですよ」

高橋「そうは言っても、廃棄がなあ」

高橋、ショーケースに近づいて腰をかがめて覗き込む。ショーケースの中には、様々なケーキが陳列されている。

高橋「これ全部、廃棄したら大損だぞ」

小春、ショーケースに突っ伏して。

小春「そんなの店長が、天気予報を信じずに作りすぎたのが悪いんですよ」

高橋、腕組みをして難しい表情をしている。

高橋「はあ、しょうがないか。小春ちゃん、どれか持って帰る？もったいないし」

小春、パツと顔をあげて嬉しそうに。

小春「やった！どれにしようかな」

小春、しゃがみこんでショーケースを物色し始める。

小春「どれもいいんですか？」

高橋「いいぞ。生菓子は持たないから」

小春「えへへへ、やった。店長はどうしますか？」

高橋「俺？俺はいいよ、食べ飽きたし」

小春「贅沢なこと言ってる」

小春、ショーケースの中からチーズケーキをワンホール取り出す。小春、ニコニコ顔で。

小春「これにします！私、ここのチーズケーキ大好き」

高橋、顎をさすりながら。

高橋「いいよ。あ、そうだ。チーズケーキのカットに挑戦してみる？」

小春「（驚いて）いいんですか？本当に？」

高橋「普段はバイトにカットはさせないけど。自分で食べるんだし。練習、練習」

小春、小躍りしながら

小春「やった」

高橋「おいおい、落とすなよ」

小春、るるんな足取りで厨房に入っていく。

○タカハシ洋菓子店・厨房・夕

作業台の上にチーズケーキがワンホー
ル置かれている。横には、カットナイ
フとお湯の入ったボール、清潔なナプ
キンが置かれている。高橋がチーズケ
ーキの正面に立っている。小春は横か
ら覗き込んでいる。

高橋「いいか、チーズケーキは断面が崩れや
すい。カットしたらナプキンで拭いて、そ
の都度、お湯で温めるんだ」

小春「その都度、ですか」

高橋「そうだ、面倒くさがらずにやるのが一
番、キレイに切れる。見本見せるな」

高橋がカットナイフを温める。チーズ
ケーキを切る。カットナイフを拭い
て、お湯で温める。高橋、カットナイ
フを小春に手渡す。

高橋「ほら、次、やってみて」

小春、緊張した面持ちでカットナイフを握る。高橋、チーズケーキの正面からどいて、小春を正面に立たせる。小春、深呼吸をしてチーズケーキにカットナイフをさす。震える手で、チーズケーキを切っていく。

小春「あ、断面が……」

高橋「チーズケーキは崩れやすい。自信を持って、スピデーに切らないと」

カットナイフを握りしめてしょぼんとしている小春。

高橋「ほら、残りも切ってしまおう。練習、

練習」

小春「はい」

× × ×

作業台の上には歪にカットされたチーズケーキが乗っている。ため息をついている小春。

高橋「まあ、初めてだからな」

小春「あーあ、パティシエになれる気がしない」

高橋「これしきで諦めてどうする」

小春「そうは言っても」

店の入口のドアベルの音が響く。

小春「えっ、お客さん！？」

小春、カットナイフを作業台に置いて厨房を出ていく。高橋、カットナイフを清掃して片付ける。高橋も厨房を出ていく。

○タカハシ洋菓子店・店内・夕

小春が慌ててショーケースの前に立つ。

小春「いらっしやいませー」

びしょ濡れの三島 明（27）が傘をたたみながら立っている。

高橋「いらっしやいませー」

三島、傘を玄関の脇に立てる。傘の下に水たまりができる。

三島「あ、すみません。びしょ濡れで」

高橋「大丈夫です。気にしないでください」

三島、ゆつくりとショーケースに近づ

いて、ケーキを見ている。高橋と小

春、ジッと見つめている。三島、顔を

上げる。

三島「あの、チーズケーキないですか」

小春「え、あ！」

小春、厨房を振り返る。

高橋「今、品切れなんですよ」

三島、濡れた頭を掻きながら。

三島「弱ったなあ。今から作ってもらうとか

出来ないですよね」

高橋、困り顔を作って。

高橋「流石に、この時間からはムリですね」

三島「そっかり、困ったなあ」

小春「明日でしたら、取り置きとができます

けど」

三島「いや、今日ほしいんですよ」

小春、小首をかしげる。

三島「いやね、俺の奥さんが今、つわりでゲーゲーしてて……」

高橋「それは……大変ですね」

三島「それで、ここのチーズケーキだったら食べられるかもしれないって言い出して」

小春、背後の厨房を気にしている。

高橋「そうですか、スフレチーズケーキやレアチーズケーキならまだ、在庫が」

三島「いや、普通のチーズケーキだって言ってますよね」

三島、スマホを取り出してラインを打つ「売り切れだって、どうする？」泣き顔のスタンプが返ってくる。

小春、高橋の袖を引く。高橋、小春に顔を近づける。

小春「（小声で）あのチーズケーキ、どうしましょうか」

高橋「あれか、いや、あれは……」

三島、スマホから顔をあげて、拝むようにして。

三島「あの、賞味期限切れとか残ってないですか。どうしてもチーズケーキが食べたいって言うって。クレームとかつけませんか」

高橋、顔をしかめて考え込む。

高橋「賞味期限切れはお売りできないんですが……」

三島「そこをなんとか」

高橋「カットに失敗してしまったのでしたら、あるんですが……」

三島、パツと顔を明るくして。

三島「いいです。それでいいんで、売ってください。お願いします」

高橋、小春を見る。小春、小さく頷く

小春「少々、お待ちください」

小春、厨房に入っていく。

× × ×

小春、トレーに歪にカットされたチーズケーキをショーケースの上に置く。

高橋「見習いがカットしたので、歪ですが」

三島「十分です。おいくらですか」

小春、チーズケーキを箱に詰めていく。

高橋「それじゃ、カッターに失敗しているので

お値引きして」

三島、財布を取り出して支払いをする。小春、ケーキの箱に3重のビニールを被せ、三島に手渡す。小春の手が震えている。

三島「ありがとうございます！」

三島、笑顔。傘を手に持って、ケーキの箱を抱えて、入口から出ていく。大雨が一瞬、吹き込む。ドアが閉まる。

小春「もつとうまく切ればよかった」

高橋、ちよつと笑って。

高橋「何事も経験だな。小春ちゃん、入口、掃除して。俺、レジ閉めるから」

小春「はい」

小春、モップを握んでカウンターから出る。

浅
木

昂